

キャバクラ失敗体験談



みなさん、はじめまして。

この『キャバクラ失敗体験談』の作者であり、お話の主人公にあたります。『ハン』と申します。どうぞよろしく願います。

まずは自己紹介をさせていただきます。

私はもともと内向的な性格のため、人と接するのは得意ではありませんでした。高校は男子校で、在学中に女性と話したことは二回だけです。

学生生活を終え、老舗の食品会社に就職しました。ところが配属されたのは3Kとも言える物流部門です。倉庫の中に入り荷物を運んだり、トラックを運転したりと、典型的な肉体労働で毎日を真面目に過ごしていました。

女性とデートをすることもなく三十歳のラインを軽々と越え、平凡な日々を淡々と送っていた矢先に、私に大きな転換期がやってきました。

それが、『キャバクラ』だったのです。

どんなに女性に縁が無くても、お金さえ払えば女性と話ができる空間。

私は、この世にこんな場所があるなんて想像もしていませんでした。

そんな私が、『キャバクラ』というものを知り、『キャバクラ』にハマり、身を滅ぼしていく過程を書き綴りました。

「皆さんには私と同じ失敗を繰り返して欲しくない」

そんな思いで書かせていただきました。

どうぞよろしく願います。

キャバクラ失敗体験談は、登場するキャバ嬢の源氏名は実際の名前と異なりませんが、内容は全て事実に基づいて書かれております。

【目次】

第一章 【素人編】

いざ！ キヤバクラ・・・その前に
キヤバ王登場！
指名嬢はナンバーワン
お触りはできないの？
キヤバ嬢の胸にタツチ！
たった十分間の語らい ナンバーワン嬢とは？
男だつたら指名替え！
お店が潰れた！
地雷を踏んだ！ ブスはなぜいるの？
初めてのお気に入り・・・しかし
キヤバ嬢とデートの約束
キヤバ嬢とデート？
キヤバ嬢とホテルへ
天使？ 悪魔？ ホテルに行つた彼女は何者？

第二章 【初級者編】

もしもキヤバクラが無かつたら
ランパブ初体験
キヤバ嬢にヤラれた！
キヤバクラ出入り禁止
巨女は六人組
私の席は待機席
ありさ嬢の誕生日
お店が摘発
大塚愛似の高級キヤバ嬢登場
キヤバ嬢のお部屋訪問！ 本当かな？
キヤバ嬢が銀座のクラブのホステスに
ランパブがセクキヤバになった！
ブスっ子倶楽部
どっちがお客なんだ？
キヤバ嬢からデートのお誘い
キヤバ嬢にワイセツ行為
キヤバ嬢の部屋で見たものは・・・
キヤバ嬢からの告白
彼との別れ話
彼氏になれない私
紗季嬢を襲つてしまった！
お友達はナンバーワン嬢
ホスト系の中村君
紗季嬢はクビ？
最後の言葉はバカヤロ―
気がつけば借金如山

第三章 【泥沼編】

キャバクラのイベント
男は巨乳に弱い？
二回通って店外デート
プライベートレッスンは
やっぱり彼がいた！
毎日が店外デート それって・・・
会話がなくなる日
指名嬢はナンバーワン（再び・・・）
ナンバーワンとナンバーワン
復活！紗季嬢
レイプされた彼女
一生で一番モテた日
たか子嬢とエッチの約束
たか子嬢のお友達とは？
突き刺さる紗季嬢の視線
たか子嬢とエッチ・・・ところが？
やっぱり子供がいた！
枕営業疑惑
ついに、消費者金融に手を・・・
彼女が妊娠？
博美嬢との別れ
色恋営業疑惑
ナンバーワンを送っていったよ！
彼氏疑惑
彼氏に遭遇
新しい生活の始まり
住めば出てくる彼女のボロ
夜の託児所
彼女が浮気？
両親がやって来た！
母子家庭は保育園に入れないのか！
弟の正体は？
彼女と別れるには別れたが・・・
行ってみたらゴミの山
ヤドカリ女は実在するのか？

第四章 【キャバ通編】

出会い系サイトキャバ嬢
ガングロギャル嬢登場
ガングロギャル嬢の意外な面
マルチな紗季嬢復活
真面目な学生キャバ嬢
チャイニーズ愛嬢
念願の店外デート？
無口なキャバラー先輩
ぼったくりパパ？ 体験談
逃した！矢田亜希子似嬢
生命保険にハマった、ハマった

潜入！ フィリピンパブ
逆色恋営業？
反省の日々 ダメなオレ・・・
ホステスはオバサマ
バカヤローと言われてしまった・・・
売掛をかぶったホステス
銀座のホステスがスナック嬢に
訴えられるホステス
お客か？ 女か？ あなたならうどっち？
キャバ嬢が会社の役員に？
遂に愛嬢の部屋に・・・
祝！ 寿引退
バツイチ・ナンバーワン嬢
キャバ嬢の両親に会っちゃった！
キャバ嬢からプロポーズ？
彼氏の定義って？

第五章 【成長編】

現役モデルキャバ嬢 急接近！
モデルキャバ嬢と結婚話？
ダブルブッキング
ザ・接待！
逆ナンパ？
ついに彼女ができたあゝ！
盛り上がらない二人の関係
彼女とホテルへ・・・
泰子嬢の誘惑
究極の選択・・・
あさみ嬢との修羅場？
彼女との旅行
京子嬢キレた・・・そして彼が
友達に降格
私・・・殺されるの？
美形 巨乳 美帆嬢登場！
ヤクザな男が京子嬢に接近
決裂！
変わってしまった彼女
意味のない旅行
京子嬢が拉致された？
最後の砦
百点満点？嬢登場
マシンガントーク
あなたが好きです・・・
お客の花道
あとがき

第一章 【素人編】

いざー！ キャバクラ・・・その前に

さあ、いよいよキャバクラへ・・・

ところが、彼女いない歴三十三年。キャバクラどころかスナックにも行ったことがありません。

ちなみに、駅から離れた会社の近くとか、家の近所とかにあつて、カウンターにママと称するオバチャンがいて、他にも一〜二名のオバチャンがいるような、場末のスナックは除きます。

最近はたまに行きますが、当時は何故こんなところにお金を出して行くのか信じられませんでした。今はそれだけ年をとってしまったんでしょうか。今考えれば、確かに一人で来ている若者なんてまずいませんでした。そういう私も、上司のお付き合いで行っていたくらいでした。

話は思いつきりそれたようで、実はそれいてません。

そう、まずは、スナックが全ての始まりでした。

私はもともと倉庫勤務で、お客さまと接するようなことは滅多にありません。あるとしたら、お客さまとの大勢での飲み会くらいなものです。ご招待したとか、されたとか。

その私が、お客さまと二人で一緒に飲むことになりました。接待などをしたことのない私は、お互いに会社から近くて、お互いに帰りやすい場所を選定し、ちょっと高そうなお店をチョイスして飲み会となりました。

そんなに仲のいい人ではなかったし、そんなに話も盛り上がりがないと思っていたのですが、何故かお客さまが・・・

「もう一軒行こう！」

と言いました。

もう一軒ということは、通常では歌でしょうが、ところが、いくら探してもスナックらしきところは一軒もありません。

「じゃあ、二人でカラオケボックスへ行こう！」

とお客様が言い出しました。

いくら彼女いない歴三十三年と行っても、男に走るわけにはいきません。

(別に、男同士でカラオケに行くことが、イコールおホモだちということではないんですがねえ・・・)

やっとの思いで一軒発見！

ここが、今まで私の知っている場末のスナックと違い、若い女性が十名以上もいるようなお店でした。

私たちの席には二人の女性が着き、楽しかったのかどうかは全く覚えていませんが、なんか女性と話をするのが、とっても新鮮な感じでした。

しゃべって歌って、一時間ほどがあつという間に過ぎました。

お会計。三万六千円・・・

私は絶句でした。

どんな高級料亭に行ったんだ、という感覚です。

内訳は、一名一万円 × 二名とボトル代が一万六千円。

しかし、今後この高額な支払いが、まるで牛丼でも食べるかの感覚になるとは、その時の私は想像することもできない、忘れられない出来事でした。

キャバ王登場！

私の身近に「キャバ王」と呼ばれる男がいます。

今思えば、彼が私の人生を大幅に変更した人物かもしれません。彼は、年に数百万円を注ぎ込むつわもんです。店はころころ変えないし、指名も変えませんが、なぜか、彼が指名する嬢はなかなか辞めません。彼は今でも行き続けていますが、多分十数年で通算五名くらいしか指名嬢がいなかったかもしれません。

さて、スナックデビューを果たした私ですが、「楽しかった！」という思いと、「ポトルが残ってもつたいない！」という思いで、再度そのスナックに行くことを決意しました。

しかし、当然デビュー間もない私は一人では行けません。そこで、友人でもあるキャバ王に同伴(?)をお願いし、スナックへ行きました。

「いらつしゃい」

前回私の席に着いた女性が私を迎えてくれました。初めて行つてから随分時間が経過したのですが、彼女は私のことを覚えていました。普段から女性に縁の無い私は、このことすらも感動を覚えるものでした。

しかし、キャバ王は、非常に居心地が悪い雰囲気でした。

それで我々はそのスナックを一時間ほどで出てしまい、近くの居酒屋に行きました。

「キャバクラと違って、音楽が鳴らないんだなあ」

キャバ王は言います。

「キャバクラって、普通は音楽が鳴っているんだ？」

「鳴っているなんてもんじゃないうよ。声が聞こえないくらいガンガンなっているよ」

「えっ、それじゃあ話なんか聞こえないじゃない」

「そう、だから会話をするためには女の子と顔を近づけなければならぬんだ」

ちなみに、これは当時のキャバクラで、今は音楽のうるさいお店は少なくなっているように思います。

「あとね、あのオヤジどもの下手なカラオケはなんとかならないのかねえ。いかにも酔っ払いの歌って感じで耳障りだ。まあ、こんな程度は大きな問題じゃなくて、決定的なことは女の子が若くないなあ」

この店は平均年齢が二十代後半くらいです。

「え、十分若いと思うけどな。うちらよりも七、八歳は若いと思うよ。」

「キャバクラは違つんだよ。十八歳くらいの娘もゴロゴロいるぞ。比較にならないよ」

「じゅ、十八歳？」

「まあ、ひとまわり違つくらいいのが普通だよ」

「そんなに年が離れていて、会話なんか成り立つの？」

「話はちゃんとできるよ」

私は全てが目からうろこが落ちる思いで、あのスナックですら私にとっては衝

撃的なことだったのに、私が想像もできない更に凄い空間があるなんて・・・

更にキャバ王は続けます。

「指名つてできないんだな」

「指名？ 何？それ」

「キャバクラは指名ができるんだよ。だから、自分の気に入った子と話ができる」
私は「女性と話せる」という空間で十分満足なのに。なんて贅沢なシステムなんだ。

スナックは、最初に席に着いた子が、その後も着くような傾向があります。ちなみに裏話ですが、指名ができないが逆指名は結構あるとか。あの客に着きたいとか、あの客は嫌だとか。

キャバ王はスナックをお気に召さなかったみたいですが、この辺は好みが変われるでしょう。

この人（指名嬢）でなければならぬ、なんとしても口説きたいとかだとキャバクラでしょうが、単に女の子と会話をしたい程度であれば、スナックでも十分でしょう。スナックの方が安上がりだから、その浮いた分を高級レストランやブレゼントに還元するとGETできる可能性もぐっと高くなるのでは？

スナックとキャバクラ あなたなら、どっち？

さて、そこで今度は彼の行きつけのキャバクラに連れて行ってもらうことになりました。しかし、ここからとんでもない『キャバクラ旅』が始まるのは、その時の私には、まったく考えることもできませんでした。

指名嬢はナンバーワン

さて、いよいよキャバクラデビューの日です。私はキャバ王に連れられて、キャバクラへと向かいました。

この街は日本でも有数の歓楽街です。そこではかなり有名なキャバクラへと潜入しました。（私にとっては、好奇心でいっぱい。まるでルポライターになった気分。）

店にたどり着くまでの間に、何人もの客引きに声をかけられます。しかし、キャバ王は全く動じることなく目的のキャバクラへ。

「お待ちしておりました」

店の前に到着すると、ボーイさんがお出迎えです。

おお、常連つて感じ。かっこいい。

彼はボーイさんと世間話をしながら席に通されます。二人で飲みに行ったのですが、何故か並んで座らされます。ちなみにキャバクラは女の子と話をしに行くところですよ。「連れ」と会話をすることはほとんどありません。というか一緒に来た気がしません。

元モー娘。の『安倍なつみ』に似た感じのなつみ嬢が席につきました。

「初めまして」

彼女は手を差し出して私に握手を求めます。単純な私は女性の手を握っただけで上気分です・・・

そして彼女は私とキャバ王との仲を裂くように間に座ります。

私は初めてなので、勿論指名はありません。こっぴつ客を『フリー』と呼び、キャバ嬢にとっては美味しいお客です。要するに、今後自分を指名してくれる可能性のあるお客であるから。実は、この時が一番モテるかもしれませぬ。キャバ

嬢は指名が欲しいために必死になり、それなりに盛り上げてくれます。勿論、個人差はありますが。

ここでキャバ王は、私にキャバクラに対する良い思い出を作ってあげようと考えてか、なんとナンバーワン嬢を私のために指名をしてくれました。

やって来たのは、『浜崎あゆみ』にめちゃ似のあゆみ嬢。
「はじめまして」

彼女も私に手を差し出して握手を求めます。

確かにスナックよりも若く美人が多いと思いました。ナンバーワンだからと言って彼女だけが突出してかわいいわけではありません。あっちにもこっちにも、かわいい子だらけです。私は、多分生涯綺麗な女性とは、話をしたことがなかったような気がします。

そして、すっかり舞いあがってしまい、やはり何を話したのかわからないままキャバデビューの日が過ぎ去って行きました。

料金は指名料込み、お一人様一万二千元

決して安くはない、というか高い。

キャバクラにハマっている人がいるとよく聞きますが、ハマるほど行くかなあ？ ただ、三年通っているキャバ王となつみ嬢は、まるで恋人同士のような雰囲気です。しかし、二人は付き合っているわけではありません。とっても不思議な空間でした。

確かに、若い！ 綺麗だ！

しかし、確かにうるさいし、若すぎて話題が合いませんでした。いいか悪いか、微妙です。行く人はいくし、行かない人はいかないでしょ。これが私の感想でした。

しかし、キャバクラ代があまりにも高かったので、もしか・・・

お触りはできないの？

キャバデビューを果たし、我々一行はその近くのバーへ。

キャバクラって、「キャバレー」+「クラブ」のこと。私はそれくらいは知っていました。多分、本当の意味は「クラブ」の高級さを保ち、「キャバレー」のような大衆向けのお店ということだと思います。

ただ、私の解釈は違っていました。「クラブ」のような高級なところで、「キャバレー」のようなお下劣なことができるところ。実際キャバレーには、行ったことではないのですが、よく、やくざ映画にキャバレーのワンシーンがあって、そこでは、お客さんがホステスさんのお尻や胸などを触っているシーンを覚えています。

「どつだった？」

と、キャバ王が感想を求めます。

「お触りとかはないの？ 一万二千元も払って、お尻ひとつ触れないの？」

と、私は素直な気持ちで質問しました。

「これだったら、ピンサロとか行ったほうがお得なんじゃないの？ ピンサロだって女の子と話せるし、もっと過激なサービスもあるし。やはり、【話しをするだけ】の世界で、あれだけ高額な金銭がかかるのがどつも納得できないよ」

するとキャバ王は
「触れるよ。俺はいつも触ってるよ。お前が女の子に夢中で気がつかなかっただけだよ」
私はそれを聞いてほっとして、
「なーんだ、勝手に損をしてたんだ。それじゃ、今度はちゃんと元をとらなくちゃ」

そして、いよいよ次回行く時はキャバ嬢のお尻と胸にタッチだあ。

キャバ嬢の胸にタッチ！

キャバ王からお触りできることを聞き、キャバクラ二度目の訪問が待ち遠しくてしょうがありません。

「そうだよ、あれだけお金を出しているんだから当然か」

そう心の中で思いながら、キャバクラへ行く日を楽しみにしていました。

そして、いよいよキャバクラへ行く日へと。

(別に日が決まっているわけではありません。通常は飲んだ後に流れるだけ)

「いよいよあの、あゆみ嬢の胸にタッチができる」

女性に免疫の無い私は、あれからずっと触ることしか頭にありません。しかし、ナンバーワンというのはほとんど席にいません・・・なぜ？ その理由は後ほど解説するとして、今は『ヘルプ』について説明しましょう。

指名嬢が他のお客と指名がダブル、他の席に行ってしまう場合があります。ナンバーワンというのは、指名数がナンバーワンということ。当然指名がダブルの可能性が高いのです。そこで、指名嬢がいない間、代わりに席に着いてくれる嬢を『ヘルプ』と言います。指名の多い子でも、他の指名が入っていなければヘルプにつくこともあります。一般的には指名の少ない子が着くことが多いのです。当然、人気嬢に比べ暇だからです。

ヘルプは指名嬢のお客に営業をしてはいけません。あくまでも「つなぎ」です。基本的には名刺も渡さないのが常識です。ただ、たまにヘルプにいい子がつく場合があり、お客さんから名刺を求める場合があります。本当はそれでも渡しちゃいけません。でも、渡しちゃう子もいます。ここらあたりで、女同士の壮絶なバトルがあるそうです。

そう、指名嬢がいなくなってしまったので、私のお触り相手は、ヘルプの女の子ということになりました。

ヘルプと言っても、スレンダーなスタイルのいい子でした。胸もスレンダーでしたが・・・顔はさっぱり覚えていません。

席に着いた時から触ることで頭がいっぱい。いくらお触りOKと言っても、座ってすぐに触るのもどうか。

そこで「スタイルがいいねえ」とか「胸元が綺麗だね」とかいろいろ褒めまくり、とにかく話題を胸中心にして、そして、さりげなく胸に触り、揉みました。

触られても彼女は特に嫌がる様子もありませんでしたが、隣にいたキャバ王は少々驚いた感じで、彼の指名のなつみ嬢と一緒にこっちを見えています。

「・・・」

なんとなくヤバイ空気を察し、とりあえずお触りタイムはこれで終わりにしま

した。

あゆみ嬢が戻ってきてても、特にそつという気にはなれませんでした。

そして、店を出ていつものバーで感想タイム。

キャバ王いわく、

「キャバクラで女の子に触っている奴を初めて見た」

そつ、彼は冗談で「触れるよ」と言ったが、本当に触るとは思っていなかったとのこと。確かに今までのキャバクラ人生を振り返っても、「お触りOK」の店でない限りは、酔っ払ったオヤジがしつこく触ろうとしているのを見るくらいで、通常は触る人はいないですね。まあ、お店にもよるんでしょうけど、高級っぽいところは触らないでしょうね。

キャバクラとは、女の子と会話や駆け引きを楽しむところ。触りたかったら、触れるところへ行きましよう。

しかし、お話をするだけで、またまた一万二千円。

このまま続けていいのだろうか？

疑問はまだまだ続く・・・

たった十分間の語らい ナンバーワン嬢とは？

ナンバーワン嬢とは、お客さんから指名される回数が一番多い嬢のことです。今回は少し、ナンバーワン嬢のことをお話しましよう。

ナンバーワンとは、一番かわいいからなるとは限りません。一所懸命営業しているとか、話がうまいとか、聞き上手だとか。まあ、それなりに努力をしないと成れない立場です。

しかし、指名する側としてはどうでしょうか。

指名がダブった時は、その時間は他の指名客と半分こします。二人だったら三十分ずつです。ところが、三人いたら二十分ずつ、六人いたら十分ずつです。指名嬢は、終了時間五分前に必ずやって来ます。それは延長してもらおうことをおねだりするためです。ということは、六人ダブっていた時は、最初の五分と最後の五分しかないということです。

(これはちょっと極端な例ですが・・・ちなみにお店によっては、均等に配分しないところもあります。先に来た客優先とか。念のために・・・)

それでもなぜかナンバーワンを指名します。それは何故でしょうか？

推測その一

そのわずかな時間でも一緒にいる価値がある子である。

推測その二

ノーと言えない日本人が多く、さすがに指名替えができない。

(指名替えとは字のごとく、他の女の子に指名を替えること)

推測その三

指名嬢の営業がうまく、ついつい乗せられてずるずる行ってしまつ。

ちなみに営業とは、アフター及び店外デートがあります。

まずは『同伴』といって、キャバ嬢がお店に行く前に、一緒に食事をして一緒

にお店に入ります。たまに居酒屋かレストランに行くと、どう見てもお水系の女の子とオジサンが、一緒に食事をしているところを見かけませんか？
会社の上司とお水系に見えるの部下かもしれないませんが、同伴の場合は女の子が出勤しなければならぬので、早々と帰ってしまうカップルがそつです。
同伴は、キャバ嬢の営業行為ではありません。お店の営業のひとつの形態です。
同伴は、同伴料というのが取られます。キャバ嬢も、同伴ノルマがある場合があります。

結構仲良くなると『アフター』というものがあります。これはお店側で義務付けられたものではなく、キャバ嬢のプライベートです。お店が終わってからカラオケに行ったり、お寿司を食べに行ったり、ラーメンだったり。こういう営業行為で、お客さんを確保します。

そして『店外デート』

これは、キャバ嬢の休日に出会うことです。指名の少ない子だと、こういう休日デートで指名を稼ぐ場合もありますが、ナンバーワン嬢レベルだと、余程の上客でなければまず応じないでしょう。彼女たちにとっても貴重な休日です。休んだり、好きなことをしたい日に、わざわざお客さんに会うのですから。指名の少ない子でも、気に入ったお客さんでないと会わないでしょうね。

ということ、ほとんどのお客さんは、お店でのひとときのために、ナンバーワン嬢を指名します。

ナンバーワン嬢は、ナンバーワンをキープするのが本当に大変みたいです。ライバルはたくさんいます。特に、更衣室等に棒グラフが貼ってあるところもあるみたいです。ナンバーワン嬢は、会社でいうと、仕事第一のスーパービジネススマンみたいなものです。指名の本数（指名は一本、二本といます）を獲得するこ

とで頭がいっぱいです。
ナンバーワン嬢は、まずお客さんと恋愛関係になる可能性は低いでしょう。特に、店に来たばかりのお客に、すぐに惚れるなんてことはないでしょう。（キャバ嬢は、「こんなに好きになった人は初めて」とか言っただけで営業します）

ナンバーワン嬢を口説くのは、地道な努力と長い年月が必要みたいです。ナンバーワン嬢の彼氏にホストが多いなどという話もよく聞きます。

もしキャバ嬢を口説くなら、少タレレベルを落とされた方が、ゲットできる確率がぐっと高くなるのではないのでしょうか。世の中タイミングで、一生懸命通っているうちに、キャバ嬢が彼氏と別れたタイミングにあなたが側にいるかもしれない。たいしてかわいくないキャバ嬢と言っても、世の中の女の子と比べればレベルは高めです。自分の身の丈をよく確かめて、口説く相手を決めましょう。

さて、私はというと、私の指名嬢は、かわいくてノリがいいのが理由でしょう。スタイルもいいのです。でも、やはりナンバーワン嬢は身の丈に合わないと思っている人のひとりです。

「指名替えをしたい・・・」

そんなことを考えてしまつたのです。

男だったら指名替え！

昔はキャバクラにハマっていました。でも、今はもう行っていません。

ここでは、キャバクラの失敗談を語っていますが、全てが苦い経験かということそんなことはありません。

(まだ、失敗というような話にはなっていませんが・・・)

私は、キャバクラで失敗しないようにと言いますが、決して行かないようにとは言いません。ただ、「失敗しないように」ということでお話しています。

キャバクラで得た、すごく大事なものがありません。彼女いない歴三十三年。いわば、誰とも付き合ったことが無かったです。キャバクラのおかげで、気楽に女性と話ができるようになりました。そう考えると、もっと早くキャバクラやスナックに行っていたればよかったと思います。

私の指名嬢はナンバーワン嬢なので、ヘルプの女の子が次から次へと来ます。いろんなタイプの女の子がいるので、いろんなパターンで話ができるようになります。このヘルプの女の子の中にはかわいい子もいますし、すごく話が合う子もいます。

ただ、ヘルプの女の子は指名ができないので、非常に残念です。

(別に指名をしてもいいんです。ただ、ナンバーワン嬢に気を遣って)

私の連れのキャバ王は、常に一時間で帰ります。たまに延長はありますが、原則は一時間です。理由は、彼はもう三年も同じ女性を指名していて、さすがに話題がそんなに続かないとのこと。一時間くらいなら、それまで会わなかった間の話で場がつながります。それに、たまに来てたらだら長く居るより、回数が多い方が印象がいいそうです。

私も指名嬢との話題が早くも無くなりました。もともと、そんなには盛り上がりたていなかったので、逆に言えば今までよくもったなと思います。あまり盛り上がりたらないので、そういう子かなと思ったら、他の席に着いている彼女を見ると、結構楽しそうです。

指名嬢は、他の席に行く時に、

「行ってきます」

と言って席を立ちます。

それは、「ここが私の居場所、もっとここでゆっくりしたいんだけど、嫌々向こうに行ってきます」というような意味合いでしょうか。

よく、向こうの客がウザくて行きたくないなあ、とか言っています。ひよつとしたら、向こうの席でこっちの席のこと(すなわち私のこと)を同じように言っているかもしれません。

そういう言葉に騙されてはいけません。彼女と話が盛り上がりたない、彼女が他の席では盛り上がりたっている、話していて楽しいヘルプの女の子がいる、

これはもう『指名替え』しかないでしょう。

こっちは客でお金を払っているんだから、指名替えは当然の権利です。ただ、キャバの世界は裏でどのようにつながつているかわかりません。

(会社の女性陣もそうかも・・・)

指名替えをすると、当然今までの指名嬢とは仲が悪くなるし、彼女と仲のいい女の子にも悪い評判が立つ可能性があります。

悩みに悩んで・・・

指名替えはできませんでした。

ホストクラブなんかは、永久指名と言って、指名替えは許されないそうです。

指名を替えたら、お店を替えましょう！盛り上がりたない女の子をずっと指名し続けるのも、無駄な出費です。

お店が潰れた！

さて、結局指名替えができず、またガラガラとキャバクラに通うことになってしまいました。

キャバ王とは、別に飲み友達ではなかったのですが、このキャバクラに通うことで飲みに行くことが多くなり、飲んだ後はかなり高い確率でキャバクラに行くようになってしまいました。そして、すごいなくなるナンバーワン嬢を指名しつつ、残りの時間はヘルプの女の子と語るのが常となりました。ただ、ヘルプの子から見ると、指名されていないので、もう一歩踏み込んだ会話になりません。「本当に何をしに来てるんだらう？ 指名さえ替えられたら・・・」

そこで、事件です。

キャバ王に、なつみ嬢から電話がありました。お店が潰れて、辞めてしまった。今度、違う店で働くようになったら連絡するとのこと。ちなみに、キャバ嬢はお店を辞めると音信不通になり、どこかで働くと、ある日突然営業の電話が来ます。

しかし、結果的には自由の身になりました。ということ、ヘルプの女の子と話すことで、女の子と話もできるようになったし、世の中の全てのキャバ嬢が自分の彼女になった気分です。

まずは、次のお店を決めなくては。
これからキャバ王との新規開拓の始まりです。

地雷を踏んだ！ プスはなぜいるの？

行きつけのお店が潰れて、何もかも自由の身になった（？）我々は、毎回のように新規開拓をしていました。

そんな中、コスプレパブに潜入しました。コスプレパブとは、ナースだったり、女子高生だったり、ミニスカポリスだったり、とにかくなんらかの制服を着たキャバクラということ。です。

さて、新規開拓の間はいろんなコスプレパブに行きました。そこで共通して思ったことは、今まで行っていたキャバクラに比べて、比較的女の子の質が落ちるような気がしました。

制服でこまかそうということでしょうか？

今までのお店が、少々レベルが高めだったこともありましたが。

そこで更に気がついたことは、百人が百人全員がプスというような女性を何人か見かけました。かわいい女の子と楽しい会話をしてナンボなのに、なぜプスがいるんでしょうか？

推測その一
多少レベルの低い子でも、そこそのレベルに見せるため。

推測その二
指名料を稼ぐために、指名をしなければプスを当てるぞという脅し。

推測その三
頭数。

余談ですが、キャバクラはお客さんの数が女の子の数を上回った場合、女の子

が席に着くまで時間をカウントされないとかが一般的です。
(一対一でなくても、一席に一人ついたらカウントされます)

ところが、たとえブスでも席に着けばカウントできます。そこで、頭数が必要だということも考えられます。あとは、ナンバーワンクラスの女の子が連れて来たとか。ただ、ブスの女の子は待機することが多いので、ブス同士仲良くなりひとつの地位を築いてしまい、ブスが軍団になり、大きな力を持つたりもします。

そのブスが席に着くことを『地雷を踏む』といいます。私も地雷を踏んでしまいました。フリーになった私は、とにかく新しい指名嬢が欲しくていつもフリーで入ります。

ところがキャバ王は、「後で場内」と言って入ります。そして席に着くと、その優れた動体視力でかわいい子を瞬時に判断して席に呼びます。

ちなみに場内とは、席についてから場内(つまりお店の中)で、指名をすることです。それに対して、普通は入り口で指名をします。しかし、それを場外指名とは言いません。(ちなみに、入り口での指名を『本指名』といいます)

さて、私のところにブスがやって来ました。単なるブスではなく、よく漫画でブスキャラっていますよね。その典型的なブスが来ました。

ただ、ブスであるのなら、それを男だと思えばまあ時は過ぎますが、話しかけてもほとんど反応なし、会話なし。それこそ、ブス一っとしています。

もうその時間は苦痛でした。多分、今まで生きてきて、一時間を一番長く感じました。

もうそろそろ時間かなと思いついて、時計を見たら十五分しか経っていませんでした。(これは、本当の話です。)

とにかくずっと沈黙。ただ、女子高生パブだったので、他の女の子を見て時間が潰せました。

そして、身も心も全てがポロポロになった時、やっと一時間が経ちました。正に、拉致から開放された心境です。指名とはこのような事故を避けるためにあるんでしょう。確かに指名料はもつたいないけど、このような苦痛な時間をお金を出して過ごすよりは、遥かにましでしょう。

指名の大切さを、つくづくと感じた日でした。日に日に成長する自分を見て、これでいいのでしょうか？ だんだんと、キャバクラにハマっていきます。

初めてのお気に入り・・・しかし

大きな地雷を踏んだ私は、新規開拓にはすっかり慎重になってしまいました。

そんな中、キャバ王のお気に入りになったつみ嬢が、新しいお店で働くことになりました。

そのお店は、キャバクラだらけの古びた雑居ビルの七階。とてもじゃないけど、飛び込みで入る客はまずいないような場所です。

雑居ビルの周りもキャバクラ雑居ビルだらけで、そのビルの入り口あたりは客引きのお兄さん方でいっぱい。これだけ客引きが多いと、何気なくここを通り過ぎることは難しいでしょう。

さて、今度のお店は前のお店の系列店で、規模は女の子30%減というところでしょう。レベルは、前とそんなに変わらない程度です。系列店ですから。

地雷だらけの戦場から来たので、今度は天の花園という感じです。顔をぶれを見ても、前回の店から流れて来た娘が何人かいました。ただ、例のナンバーワン嬢はいませんでした。ひとまずはホッ。

私は、席に着くとすぐにまずはトイレに行きました。そこで優香似の女性とすれ違いました。私は彼女のことはとつてもかわいく思いました。ただ、通常はこういうかわいい子が席に着くことはほとんどありません。だから場内指名をしなければならぬでしょうね。

しかし、席に着くとなんとその彼女がやってきました。なんか、こういうのって運命を感じます。

話をすると、彼女の住んでいるところが、以前に私の住んでいたところで、共通の話題もあり、話がけっこ盛り上がりました。

かわいしい、感じもいしい、共通の話題もあるし、もう最高！ という感じでした。

しかし暫くすると、彼女は席を立てて他の席に行ってしまった。指名がダブっていたのでしよう。残念ではありましたが、彼女の帰りを待ちました。

ところが、彼女は戻ってくることなく、時間になってしまいました。何故彼女は戻って来なかったのかと、ボーイさんに問うと・・・

私が彼女を指名していなかったから。
そう、ナンバーワン嬢の頃は、指名が当たり前だったので、彼女を指名するのをすっかり忘れていました。そう言えば、彼女が席を立つ時、普通は「行って来ます」と言って席を立つのですが、彼女は「ごちそうさま」と言って去って行きました。

気づくべきであった・・・

非常に大失敗だったので、また来ればいいだけの話です。名前もしっかり覚えているし。

しかし、出勤日をちゃんと確認していなかったので、次に行った時は彼女はいませんでした。

その次も、その次も・・・
そうして、「彼女は辞めました」と言うことを告げられました。

初めて自分の意思で指名をするはずの子だったのです。
まだまだ、お気に入り嬢に出会うのには、時間がかかるのでしょうか。

いつになったら、一人で歩けるのでしょうか？
キャバクラ歴九ヶ月です。

キャバ嬢とデートの約束

やっとできたお気に入りを入りを逸してしまい、またいつものようにキャバクラへ行ってしまいました。

そこへ、なんと私がデビューした店のナンバーワンのあゆみ嬢が入店してしまったのです。指名替えできず、お店が潰れたおかげでやっと彼女から開放されたのに。

しかし、指名する義務はありません。
考えに考え抜いて、結局・・・

指名してしまいました。

しかし、その時のあゆみ嬢はとっても愛想がよく、それはそれで楽しい時間を過ごすことができました。だけど彼女は元ナンバーワン。今は、復帰したばかりなので指名が無く、ずっと私の席にいました。この状態が続くなら、彼女はOKです。でも、結局はまたナンバーワンになってしまい、最悪一時間に十分しか居ないことになるのでしょうか。

店を出て、悩みに悩んで、やはり彼女を指名しないことを決断しました。

次の時、男四人で繰り出し、私はフリーにしました。

そこで、キャバ王はもつたいないので、他の友人にナンバーワンのあゆみ嬢をつけてあげました。

あゆみ嬢は当然私が指名したものと思い、私の隣に座ろうとすると、ボーイさんが私の向かいの席を指定。彼女は不思議な顔をして、私の向かい側の友人の隣に座りました。ちなみに、これからも私はこの店に通い続けますが、これより先、このあゆみ嬢と会話をすることは二度とはありませんでした。

私の隣には、女の子が座り、またいつものようにそこその話をしていました。

そうして、彼女に指名が入り、また次の子が席に着きました。

その子は、例えるなら元モー娘。の『保田圭』似の子でした。圭ちゃんをかわいという人はあまりいないのかなあ。でも、圭ちゃんもその辺にいとかわいんじゃないかなあ。

彼女は、私の会社と同じ系列の会社のOLです。週に三日お店に入っていて、海外旅行に行くお小遣いを貯めるためだけに働いているみたいです。圭ちゃんも働いている街と私の働いている街が同じで、会社の共通の人物の話や、その街の話で盛り上がりました。そして、彼女がよく行くバーは私もよく行くバーで、明日そこで一緒に飲もうという話になりました。

そうしてチエツクの時間になり、我々は帰りました。しかし、彼女が席についてから我々が帰るまで、わずか十五分の話でした。こんなので、デートはOKなのでしょうか？

果たして、彼女は待ち合わせの時間に来るのでしょうか？

キャバ王、「来ない方に一票」ということでした。

世の中は甘いのでしょうか？ 苦いのでしょうか？

キャバ嬢とデート？

さて、キャバ嬢圭ちゃんとのデートの日。

同伴も無し、アフターも無し。指名すらしていない圭ちゃんと果たしていきなりデートなんかできるのでしょうか？

友人のキャバ王曰く、

「絶対来ない。おまえはまだキャバクラの現実をわかっていない。キャバ嬢は平気で約束を破って、それで後で会ってもケロっとしているもんだ」と。

棚からぼた餅は落ちてこない。ひょうたんからコマは出てこない。

そう説得され、それでも所定の時間に所定の場所へ。

しかし、仕事が長引き待ち合わせ時間に遅れそうになってしまいました。ちよつとでも遅れたら、例えば遠くから見ている、

「いないから帰っちゃった」

と言われたらおしまいです。

もし来なかったら、会って問いただそうと思ったのですが、問いただすためには、指名をしなきゃあならないんですね。

結局罷か？

そうして、約束の時間。

来ない・・・

でも逆になんかホツとしました。ここ数年女性と食事をしたこともないし、正直何を話しているのかもわからない。キャバクラだと、こちらは客だから、キャバ嬢が気を遣って話してくれるけど、デートだとそんな義務はないでしょうし。

そんな、いろいろなことを考えていたら、

彼女が現れました。

正確には、たった十五分しか話していないし、顔をよく覚えていなかったのですが、彼女らしき人が現れました。ただ、彼女もこちらを見て挨拶しているので、多分彼女が圭ちゃんなんでしょう。キャバクラで見ると少々雰囲気違って、正にOLさんと言った感じでした。

しかしながら、キャバクラとはお酒を飲んだ勢いで行くところです。今の私はまさにシラフです。それに、女性とこうして二人きりで食事をするなんて、本当に何年ぶりかなので、何を話していいやら・・・

「この間お店で、海外旅行の資金を稼ぐために働いているっていったよね。」
と、何とか話を切り出しました。

「どこに行くの？」

「ロサンゼルス」

おっ、ロサンゼルスは私は以前行ったことがあります。

実は私は海外旅行が好きで、ひとりであちこちに行ったことがあるのです。人に語れる唯一の趣味かもしれません、数少ない話が彼女にハマったみたいです。

「女性と話す時は海外旅行ネタが使えるかもしれないなあ」

そんなことを考えながらも、この話は意外と盛り上がりました。

一時間くらい経った頃でしょうか。彼女が、半分くらい残ったロングカクテルを一気に飲みほしました。

「あっ、もう帰る時間なんだな」と思いました。

ところが、彼女は青汁のおかわりのように、「もう一杯」と注文をしました。

「あれ？ 帰るんじゃないんだ」と、心の中で安堵の気持になりました。

そうして、時間は十一時半近く。

彼女は、少々遠いところなので、もうそろそろ帰らないと間に合いません。しかし、わざわざこちらから帰すようなことを言うのも・・・。

ここは、彼女から帰ると言い出すまで、待っていきましょうと思いました。

そうして、時間は午前一時。閉店時間です。

飲んだカクテルは二人で三十杯。お値段は、四万円。キャバクラ代以上です。時間は六時間一緒にいたので、彼女とキャバクラで六時間飲んだと思えば、かなりお得だったのかもしれないが……。

さて、この先です。

どうしようか。私も帰れなくなってしまいました。考えられるのは朝までカラオケですね。彼女はカラオケが好きで、週に二回は行っていると言っていたし。

特に次に行く先を決めずに私たちは店を後にして、エレベーターで一階に降りて行きました。

ところが、なぜか、どうしてかわからないけど、彼女とキスをしてしまいました。

そして、彼女に腕を組まれて、一気に恋人モードです。

そうになると、行き先はカラオケでなく、当然ホテルでしょう。

さてよ？ ホテル？

彼女いない歴三十三年。ホテルなんて行ったことがありません。

ホテルってどこにあるの？

どうやって入るの？

今からでも入れるのお？

キャバ嬢とホテルへ

無事？ キャバ嬢とホテルに行くことになった私。

ですが、ホテルなんて行ったことがありません。ここはビジネス街。当然ホテルはありません。とにかくタクシーで移動しなければホテルはありません。確か、高速道路の出口近辺にホテルがいっぱいあったような気がしましたが、まさかここからタクシーに乗ってそんな遠くには行けません。運を天にまかせ、タクシーに乗り込み、とにかく渋谷へ行くことにしました。

タクシーを降りてまわりを見渡すと、駅とは反対方向に歩いて行くカップルが何組かいました。

もう、ついて行くしかないですね。

多分、彼女に聞けば一発でわかるんでしょうけど、そんなことは聞けません。

そうして、少し歩くとホテルが見えてきました。

やったああああ！

ちなみに、彼女はまさか私の頭の中がパニック状態になっているなんて思っていないでしょうが、私は六時間も飲んだカクテルやら水割りやらがどこかへ行ってしまうました。

ん？ 入り口はどこ？
ついたてで仕切られていて、入り口が隠れている。

ついたての陰に入り口らしきドアが。そこから中に入ると部屋の写真が一枚だけ光っているのが見えました。

その下にボタン。はっきり言って入り口も、このボタンも何から何まで初体験で、どうしていいのかわかっていませんでした。

しかし、ここは思い切って、

ボタンをプッシュ。

受付らしきところに人の気配。そこからカギをいただいて部屋に向かいます。何もかもが初めてで、本当に何をしていいのかさっぱりわかりません。

部屋に入って二人きりになって、あらためてキスを。本当に恋人同士のようなムードです。

知り合って3日目。

逆に言うと、3日前までは存在も知らなかった彼女。

その彼女といきなり恋人同士のようなムードになるなんて。

私はゆっくりと彼女の胸に手を伸ばし、そのままベッドに倒れ込みました。

それからは、本能のまま、動物のように……

私たちは次の日、朝早く起きて、彼女とは駅で別れました。

携帯の番号は聞いたけど、彼女には彼氏がいるとのこと。ということ、キャバ嬢が彼女になつたわけではありません。

ただ、そんな彼女でもとつてもかわいく思えたし、そしてとつても好きになつてしまいました。

今後、この付き合いはどうなっていくんだろう。一夜だけの付き合いだったんでしょか？

キャバクラ経験十ヶ月目の出来事でした。

でも、彼女の正体って、いったい何なんでしょう？

天使？ 悪魔？ ホテルに行った彼女は何者？

『キャバ嬢とホテルで過ごす』という、ドラマのような体験をしました。

これは、彼女の気まぐれ？ 本気？ それとも営業か？

私は家に帰って、着替えてそのまま会社に行きました。

そして、会社でキャバ王に会いました。

「昨日は彼女は来なかったらどう？」

「いや、彼女は来てくれたよ」

「そうなんだ、じゃあ飲みに行ったの？」

友人のキャバ王に全てを告白しました。
非常に冷やかな目で見られます。

「ビギナーズラック」彼は言います。

そうこうしているうちに、恒例のキャバクラへ行く日。
当然私は、圭ちゃんを指名。

その時は、ホテルで過ごしたのが本当なのかと思うくらい、自然に会話をしていました。ただ、彼女とは一晩中一緒にいた関係なので、とっても親しい感じでのキャバクラでのひと時でした。

よく考えてみたら、今回が初めて自分の意思での指名でした。

そうして、なぜか彼女と電話をすることもなく、キャバクラに行った時にデートの約束をします。そして、デートをして、時にはまたホテルに行きます。しかし、その時は次のデートの約束をしないで、またキャバクラに行きます。そして、そこでデートの約束をします。

この繰り返しです。

そう考えると、これが彼女の営業方法なのか、どうなのか。

彼女は、週に二〜三回入っていて、固定の指名は二人。両方ともオジサンです。二人とも早めに来るので、私とバッティングすることはありません。彼女は、旅行資金を貯めるだけに働いているので、できれば指名はされたくないと言っていました。

こういう、キャバクラ嬢もいるんでしょうか。

そうして、キャバクラへ行って、デートをして。これを繰り返しました。
彼女には彼氏がいて、今はうまくいっていないとの告白がありました。

チャンスか？

彼女に旅行資金が貯まり、そろそろ辞める時期になった頃、私は大きなプロジェクトが始まってしまい、それこそ、キャバクラどころか、家にも帰れない日々が続きました。

彼女のことには気になってはいましたが、こちらから電話をすることもなく、彼女からかかってくることもありませんでした。

三ヶ月が過ぎ、プロジェクトが落ち着きました。

彼女が店を辞めたことは、キャバ王から聞いていました。

そして、思い切って彼女に電話を試みました。

彼女は既に、普通のOLに戻っていました。彼氏とは別れたと言っていました。

また、一緒にゴハンを食べに行こうと約束をしました。

でも、その電話を最後に彼女には電話をしていません。また、彼女からも電話はかかって来ませんでした。

とつても不思議な子でした。

でも、今でも彼女と過ごしたことは忘れないし、モー娘。の保田圭ちゃんも好きになってしまいました。

キャバ歴、一年四ヶ月の出来事でした。

第二章 【初級者編】

もしもキャバクラが無かったら

久しぶりに歌舞伎町に来ました。

この街を歩いてみると、ちょっとカワイイ女の子は、みんなキャバ嬢に見えるのは「わたしだけ？」

尾行していくと、みんなどこかのお店か風俗に入って行くような気がします。よく考えてみたら、キャバクラというのは私みたいにモテない男や、女性に縁遠いオジサンに、ちょっとした「非現実空間」を与えてくれているのかもしれない。

もしもキャバクラがこの世に無かったら、あんなにレベルの高い女性と、ひよっとしたら生涯会話をすることなく、人生を終えてしまうかもしれません。そう考えると、キャバクラは我々に夢を与えてくれる場であり、キャバクラ嬢は、天使なのかもしれません。

私は、今では全くキャバクラに行かなくなりましたが、あの営業電話や営業メールが懐かしくなることがあります。最近あまりにも迷惑メールが多いので、迷惑メールを防止したら、メールが誰からも来なくなりました。私のメールは迷惑メールで成り立っていたんでしょうか？

私は今まで、キャバクラ嬢のことを悪く思っていました。この街を歩くと、何やら懐かしい事柄が、走馬灯のように頭を巡ります。

キャバ嬢は、嘘をつくのが仕事みたいに思っていました。そこは訂正させていただきます。

キャバ嬢は、嘘をつかなければ仕事にならない。

結局は、そこには「真実はない！」

ということ。キャバクラ失敗体験談第二章の始まりです。

第二章・初級者編は、いきなりランパブです。

ランパブ初体験

仕事が忙しくなり、すっかりキャバクラはご無沙汰になってしまいました。

キャバ王は相変わらず通っていたみたいですが、私は倉庫の中に缶詰め状態で世の中のどんな女性を見てもかわいく思うくらい感覚がマヒしていました。

仕事も一段落ついて、久々にキャバ王との飲み会です。

当然いつものように、二次会はキャバクラ。

ところが、キャバ王は最近マンネリしてきたと訴え、また新規開拓をすることになりました。

そして、新規開拓先はなんとランジェリー・パブです。

道を歩いていたら、オジサンから割引券をもらって行くことにしました。

お店に入ると写真がずらり貼ってあり、好きな子を指名できます。風俗にはよ

くある傾向です。そして、写真のふちに「トップレス」とマークがあります。この「トップレス」マークは、ショータイムの時にブラをはずす意味ということです。

ちなみに、最近ではランパブとは死語に近く、今では「セクキャバ」というのが市民権を得ているような感じですが。セクキャバではショータイムは「お触りタイム」ですが、当時のランパブのショータイムは女性が目の前でトップレスになる程度で、お触りは無しです。

キャバ王は、迷わずトップレス嬢を指名。私は、いつものようにフリーで入場です。

私の友人キャバ王は、ぱっと見コワイ感じで、二人でフリーで入ると、必ず彼にカワイイ子がつけられて、私には、いかにもヘルプという感じの子がきます。しかし、今回は彼は写真指名をしています。

その時私の席に着いた子は、山田優に似た感じの子です。スタイルは超抜群。背も高くモデルみたいにスラッとしていて、とにかく足がめっちゃめっちゃ綺麗。ただし、胸は無い。

ランパブはキャバクラと違って、女性が腕を組んできたり、肩を抱いたり、ふとももをスリスリしたり。とにかく、どの席も密着モードです。

私も、その美人の優ちゃんを超ランパブモードで、もう最高です。

そしてショータイム。

キャバ王のひざの上で、巨乳ギャルの胸が揺れています。

私に付いた子は、トップレスにはならない子です。どうしてトップレスにならないのかと聞くと、胸が小さいからだとか・・・なっとく・・・

しかし、ランパブモードで調子に乗って、ショータイムの時にブラの中に手を入れて、胸をモロに触ったり、口にキスしてもらったりと。

ショータイムはプラス二千円ですが、そのプラス分が無ければ、キャバクラと費用は変わりません。

費用対効果。それを考えると、ランパブのほうがずっとお得。かわいいし、超密着ランパブだし、あちこち触れるし。

彼女は指名上位かと思いきや、全然席を動きません。

結局一時間、彼女は全く動きませんでした。

これは、当たりだ！

今度から、ここに通うぞ！

そう思ったのでした。

ちなみにキャバ王の指名嬢は、カワイイし巨乳でしたが、ずっと彼氏の話ばかりしていたとか。もう指名しないみたいです。しかし、彼もリベンジしたいという事で。

また次回もランパブへ。

そこには、思わぬ落とし穴が・・・

キャバ嬢にヤラれた！

超かわいくて、ラブラブモードの優ちゃんに、もう会いたくて会いたくてたまりません。彼女は私のことをすごく好きだと言っていました。好きだから、キスマシタと。その言葉を100%信じました。

「ついに彼女ができた！」

しかも、こんな美人。

そうして、キャバ王と再びランパブへ。

入り口で彼女を見かけ、彼女もこちらに気づきました。彼女は私のことを当然覚えていました。

「彼氏だから当然」・・・バカだねえ。

しかし、なかなか彼女は席に着きません。今日は指名が入っているのか。彼女は奥の方に見えます。

そうして彼女が移動しました。しかし、私の席には来ません。

やっと、彼女がやって来ました。

「今日は指名がたくさん入ってるの？」私が聞くと、
「たまたま重なっただけ」と彼女は答えます。

そうしてちょっとしたら、また彼女は席を離れて行きます。

そろそろ一時間が経ちますが、彼女は帰って来ません。

皆さんはもうお気づきでしょうか？
ヘルプで着いていた子に聞きました。

「優ちゃん？ この店のナンバーワンだよ」と。

ヤラれたあゝ。

またまた指名嬢はナンバーワン嬢。そうして、私が帰るぎりぎりのところで席に戻り、延長をおねだりします。

かわいいけど、すごく裏切られた感じで。やっぱりナンバーワンともなると接客がすごい。前にナンバーワンの件がなければ、このナンバーワン嬢の術中にハマっていたでしょう。

私は指名替えを決意！

前みたいに、「男だったら指名替え！」と言いながら、ずるずる行くことはありません！ まだ、指名は一回だけ。傷は浅いぞ！

ということ、本気で指名替えをしました。

でも、ナンバーワンってプライドがすごく高いので、指名替えは、屈辱でしょうね。指名替えをすると、お店の中ではすごく気まづくなります。彼女が近くに來ると緊張したりします。それでも、彼女とはもう口をきくことも無く、同じ空間で過ごすことになるのです。

ところが、この彼女とは数年後に再会しますので、ランパブの優ちゃんを覚えておいてください。

キャバクラ出入り禁止

ナンバーワン嬢の指名替えをあっさり決意して、何くわぬ顔をして再び例のラ
ンパブへ。

入り口で、ナンバーワンの優嬢につこり挨拶されましたが、またまたフリー
で入場しました。

席にやって来たのは、観月ありさ似？

大きなカテゴリの中に入れてしまえば、みんな誰かに似ているものです。

三遊亭圓楽もカテゴリ的には館ひろしの分類に入るといふ意見もあります。

(馬ってカテゴリか?)

さてこの観月ありさ似嬢ですが、観月ありさの全てのパーツを拡大してくださ
い。腕も、足も、体も。しかし、何故か胸は拡大しません。しかも、観月ありさ
と言えば、小顔が売りですが、そのパーツも大きくしてください。それが、席に
着いたありさ嬢です。

しかし彼女との話は結構盛り上がりました。そして、彼女はキャバクラで働く
のがあまり好きでないとのこと。席に着く客の九割は、嫌な客だと。

しかし、私の席に着いて、久しぶりの「当たり」の席だと喜んでいました。

うーん、キャバ嬢の常套手段。しかし、当時は喜ぶべきお言葉。

彼女の方から、今度一緒にゴハンを食べようとも言ってきました。そんなにカ
ワイ子ではないけど、ノリはばっちり。そして、彼女と携帯電話の番号を交わ
しました。

彼女が言うには、いつも勤務の前にゴハンを食べてから行くから、その時に一
緒に食べようというものでした。

それって・・・同伴？

しかし、店に来いとは言っていない。

そして、彼女と会う日。

彼女の友達も一緒でした。

その友達。芸能人に似た人はいない感じですが。女子プロレスラーによく似そ
うなタイプかな？ ありさ嬢もデカいが、この女子プロ嬢も更にひとまわりデカい。

飲み屋でかなり盛り上がり、三人ともかなり酔っ払っていました。

そうして、「お店に来る？」と聞かれ、酔った勢いで行ってしまいました。

三人でお店に向かったのですが、私は160cmの小男。まさに、両手に花で
はなく、両腕を組まれ、単に連行されている風景でした。

そして、三人でお店に乱入？

酔っ払った三人は、店でも大盛り上がり。キスはするは、パンツに手をつっこ
むは。もうやりたい放題。めっちゃめっちゃ。

あまりの失態ぶりに、店長がやって来て、二、三度注意されたあと、店を出さ
れてしまいました。

思えば、これがキャバクラひとりデビュー&初同伴でした。

もう、キャバ王がいなくてもひとりで行けるぞ！
しかし、これって出入り禁止ってこと？

巨女は六人組

酔いがさめて・・・

昨日の出来事。

半分は覚えていて、半分はよく覚えていません。

ただ・・・なんとなくランパブで大騒ぎした記憶が・・・

しばらくして、ありさ嬢から電話がありました。

彼女も彼女の友達も良く覚えていないとか。ただ、あまり気にしないでまた来ればと言われました。

それから何度か、ありさ嬢とは出勤前に食事をして、同伴をすることなく家に帰りました。

そうしてキャバクラに行かない日が続きました。

ありさ嬢から、みんなで鍋をやるから来ないかとの連絡。

「みんな？ 何人来るの？」
「五人」

これは一人で行ってはもつたない。

さっそくキャバ王に連絡して、鍋料理店へ。

そこには、ありさ嬢と女子プロ嬢の他三名。
ん、何と表現したらいいか。正直、あまりかわいくなって、しかもデカイ。

ひとりを除いては。

このひとり。

みんな巨大なのに、彼女だけは小柄です。乙葉似のかわいい子。

乙葉似の彼女は指名上位の子。あとの四人は、下位指名を支えているといったところでしょうか。

それにしてもデカイ。

平均身長167cmといった感じです。

「いつも五人なの？」とありさ嬢に聞くと、

「ううん、私たちはいつもは六人だよ。私達と優ちゃん」

「ゆ、優ちゃん？」

「ハンちゃん、優ちゃんを指名替えしたでしょ。彼女、怒ってたよ。ナンバーワンだからね。でもね、今回はちゃんと気をきかせて呼ばなかったんだから」

「そうだったんだ・・・」

ホント、この世界。どこでどうつながっているかわからない。
とりあえず、キャバ王と私と五人組み。

二対五の合コンみたいになりました。

飲み会は盛り上がったというより、彼女たちの飲み会に我々が参加している感じですか。

酔っ払ってけっこう乱れてきた頃、そろそろ出勤時間ということで、彼女たちはいきなり化粧をし始めました。

マタもガバッと広げて、パンツも丸見え。完全に我々が男だということを忘れてる感じですか。

まっ、パンツが見えても、彼女たちはランパブ嬢だから、あとでたっぷりパンツが見えるわけで……

キャバ王は、アツケにとられていたましたが、乙葉嬢を気に入って、今後彼女を指名することに。

キャバ嬢とプライベートで仲良くなったけど、これでいいのかな？

この後、この連中とずるずるとお付き合いします。

私の席は待機席

ありさ嬢をはじめとした一派は、決してブスではありません。

キャバ嬢にしてはかわいくないということ、一般で見ると、普通のデカイ子たちです。

ありさ嬢、女子プロレス嬢、乙葉嬢の他を紹介しましょう。

ひとりには、オセロの中島知子似のデカイ嬢。

もうひとりには、ドラえもんのスネ夫とかキツネとかに似た子です。

この二人は、一応スリムです。

さて、『待機席』ってご存知ですか。

お客さんの数よりも、女の子の数が多い場合、女の子が一箇所にかたまっ

て座っています。固定席があつたり、たまたま空いているところであつたり。

女の子が待機している席で、『待機席』と言います。

オープン直前から夜九時頃までは、誰かしら座っているんじゃないでしょうか。特に同伴で入る時、待機嬢全員に迎えられる場合があります。

これって、結構恥ずかしい。

スナックだと、女の子の数の方が多い場合は、全員を分散させて付けたりします。客が私だけだと、一人に複数の女の子がついたりします。最高で、二時間他のお客が来なくて、八人の女の子がついた時がありました。

あくまでもスナックの話。

さて、五人組に気に入られた(カモられた?)私は、再びランパブへ。

私がありさ嬢と席に座っていると、残りの四人がやって来て宴会状態です。乙葉嬢はすぐにいなくなりませんが、他はみんな残っています。そして、店が混ん

くとひとり、またひとりいなくなります。

ところが、ありさ嬢を指名するもの好きもいます。一応、彼女たち五人組にも指名客がいるようです。そうすると、誰かがこの席に残ります。こんなことが毎度続きました。

と言うことは、私の席はまず五人組の宴会から始まり、最後には誰かが残りま

す。ちなみに、単なる待機席になっているだけなので指名料はありさ嬢の分しかかかりません。
非常に高い確率で残るのは、知子嬢です。彼女は二十五歳でこの中で一番年長なので、一番話が合いますし、話していて、ほっとするものがあります。

五人がぐるぐる回っているだけなので、私の席にはヘルプ嬢は来ません。正直言ってもっと他の女の子を知りたいのですが、それは万一、全員に指名が入った時でしょうが、そんなことは一度もありませんでした。だから私は、この店にどんな子がいるのか全然知りません。

この、別名『待機席』である私の席。

指名の最中でも、女の子が戻って来て休憩していきます。はっきり言って、乙葉嬢以外はみんなヤル気無し。ただ、他の客から見ると、女の子を五人囲っているわけで、なんてハーレムな金持ちなんだろうと思われていたのでしょうかね。

でもね、キャバクラって、かわいい女の子と会話を楽しむところで、なんか目的が全然変わってしまっているような・・・

ありさ嬢の誕生日

キャバクラ嬢の誕生日はビッグイベントです。
それは、誕生日をエサにお客を呼ぶわけです。

自分に彼女がいたら誕生日ってビッグイベントですよな？

疑似恋愛の場であるここでも、疑似彼女の誕生日というわけですから、お気に入りのいるお客は、その彼女であるキャバ嬢をお祝いする、それが誕生日イベントです。

どれだけのお客がお祝いに来てくれるかで、その子の価値が判断できると言ってもいいでしょう。それは、キャバ嬢にとっても自分の価値を確認できる、現実を見る、ある意味恐ろしい日でもあるのです。

ありさ嬢にも当然誕生日はあるわけで、これもビッグイベントです。

ありさ嬢から、「一月二十一日は誕生日でお店に入っているから」との連絡がありました。

当然無視するわけにもいかず、しかし正直言っでは是非とも祝いたいという気持ちも無く。でも、結局誕生日にお店に行く約束をしました。

その日はもともと用事があったて、同伴はできなかったもので、遅くなくても必ず行くと言っておきました。彼女にも、他にも指名客がいるわけで、私が同伴しなくても他の人が同伴するので、正直義理でお店に行くことにしました。

用事とは飲み会だったので、二次会まで行ってしまい、お店に着いたのは、夜の十一時三十分でした。

ぎりぎりセーフというところでしょうか。

ありさ嬢は、とっても喜んでいました。

(まあ、演技でも喜んでフリをするでしょう。)

そして、私たちの席には大きなケーキが。

彼女が言うには、「誕生日に来た最初の指名客に店側が出してくれる」ということでした。

ということとは、十一時三十分で、私が最初の客ということ。確かに、まわりを見渡しても、花なんて全然ありません。

以前この店で、指名上位嬢の誕生日がありました。それこそ花のための席が

あって、それはそれはにぎやかでした。不人気嬢というのはこういうものなのでしょう。なんかとつても淋しい気持ちと、彼女への同情心があつて。顔はにこにこしながらも、しみじみとゲーキをいただきました。こういうことが起こるキャバクラって、残酷な世界のような気がします。彼女たちは、お客をうまくあやつりながら、その日を過ごしますが、そこには、女同士の中のぎ合いがあるのでしょうか。

その人自身の価値を、このような目に見える形で評価されるとは、これが夜の世界の現実なんですね・・・

お店が摘発

最近の私の行動は、キャバクラ嬢の友達ができたということでしょうか。ゴハンだけ一緒に食べたり、ランパブに行ったりと。

ただ、強制同伴の日は呼ばれて同伴します。時間が無い時は、『店前同伴』と言って、食事をせずに一緒に入るだけというのがあります。私としては友達がついてくるから同伴しているんだけど、やっぱり友達と称した単なるカモかもしれせん・・・

こんなことを繰り返しているうちに、ありさ嬢から電話がありました。「お店が摘発されたので、全員系列の普通のキャバクラに散っていった」

彼女に会って詳しく話を聞くことにしました。

早い時間には会えなかったのですが、彼女の指定するキャバクラへ。

五人組はバラバラになって、この店にはありさ嬢と乙葉嬢のふたりが行くことになったみたいです。

行くとそこには、『お水スーツ』の彼女が。いつもは下着姿だし（見慣れちゃうと、何の感動もありません）、一緒に食事をする時は、ジーンズにTシャツだし。なんというか、やっぱりお水スーツっていいですね。

個人的には、コスプレや下着よりも、一番いいのはやっぱりお水スーツです。スカートから、太いふとももがのぞいていて、これがたまりません。なんか違った意味で新鮮で、ありさ嬢もそれなりに可愛いく見えます。

さて、どうして摘発されたのか。

実は、お店のキャバ嬢の中に十七歳の子がいたとか。それで、スタッフ総入れ替えで、一カ月後に再開だとか。

まあ、少なくとも、当分待機席になることはないわけで。

その時隣の席には、蛭原友里似のものすごくかわいい嬢が接客していました。聞くとお水もランパブ嬢だとか。そう言えば、いつも五人組に囲まれていて、お店の事情をよく知りませんでした。

この友里嬢は、お店のナンバーツーとのこと。正直言って、ナンバーワンの嬢より彼女の方が好みな。多分、ナンバーワンの嬢の方が、口がうまいんでしょうね。

さっきは、下着姿のキャバ嬢がお水スーツになると、そそのものがあると言いました。この友里嬢がランパブ嬢なら、是非とも下着姿を見てみたいものです。（なんか矛盾しているなあ）

ここに通うのもいいけど、ありさ嬢がいるから友里嬢は指名できないし。また、更なる新規開拓でもしよっかな。

大塚愛似の高級キャバ嬢登場

私のランパブ生活も、お店の摘発で一段落。

私はいつもの友人キャバ王を誘って、またまた新規開拓へ。ここで、自分が成長したと思うのは、自分の方からキャバ王を誘うようになったことです。

やっぱり、キャバクラに通うという事は、そこそこレベルの高い女の子と知り合いになって、楽しく時を過ごすというのが基本でしょう。最近の私は、キャバ嬢と仲良くなったのはいいのですが、擬似恋愛でも何でもなく、女友達と高いお金を払って時を過ごしていた感じですよ。

今日は早々に食事をし、もともと新規開拓が目的だったので、キャバ街をぶらぶら歩いていました。

そこへ、白いスーツを着たギャルがズラーツと並んでいました。まるで、何かのキャンペーンガールみたいです。店の前に立って、みんなでチラシを配っていました。見ると、どの子もカワイイ子ばかりで、我々一行はこの店に決めました。

入ると時間が早いせいか、待機の女の子がたくさんいて、総出で出迎えられました。正直言って、恥ずかしい気分です。

その時席についたのは、大塚愛に似たとてもカワイイ子です。彼女は、先ほど入り口に立っていた子だったんですが、正直言って、みんなカワイイ！ という印象だったので、彼女のことはあまりよく覚えていませんでした。

この店は、在籍の女の子が百五十名いる、非常に大きな店で、女の子のスーツも、白か水色かピンクという、非常に清楚なイメージを我々に植え付けます。

私はその大塚愛に似た彼女を指名しました。

これが、まだまだ素人なんです。一度指名しちゃうと、次に自分が気に入った子を見つけたら、それは「指名替え」になってしまいます。キャバクラで新しいお店に行った時は、まずはどんなに気に入った子がいても指名しないのが基本です。

キャバ王は、相変わらず目を光らせていて、また、一番カワイイ子を指名するつもりなのか？ でも、こんなに女の子がたくさんいて、本当にお目当ての女の子を探すことができるのでしょうか？

私についた愛嬢。

かわいいけど、なんかしゃべり方が非常にプロっぽい。

キャバ嬢と話しているよりは、銀座のホステスさんと話をしているみたいです。（銀座のホステスさんって、よく知りませんが・・・）

ヘルプについた子も、なにかマニュアルに沿って接客しているみたいで、確かに普通のキャバクラみたいなのに、どっちが客だかわからないようなことはないけど、まさに「ホステス」を絵に描いたような子たちでした。

愛嬢は、私の携帯の番号を聞き、明日電話することです。

ちなみに、自慢ではないですが、私は今に至るまで、キャバ嬢に電話番号を聞

いたことはないし、自分から教えたことありません。
(やっぱり自慢か？ でも、これがこだわりなんですよね)

この店を出て、キャバ王と感想を述べるため、いつものバーへ。

「なんか、女の子に特徴を感じられないねえ」とキャバ王。
「えっ、オレも同じだよ。まるで、金太郎飴のようなキャバクラだよ。確かに非常に教育が行き届いていて、みなさん優等生って感じだけど、会話もありきたりだし、ヘルプに着いた子の印象も全然ないよ。みんなカワイイんで、ヘルプもヘルプって感じがしないよね。」

キャバクラって、キャバレーの大衆さとクラブの高級感がミックスされたものだけど、こんなクラブみたいなキャバクラなら逆に引いちゃう感じですね。やっぱりキャバクラって、大衆さ、お気楽さ、おバカさがあって楽しいのかもしれない。

と言うことで、この店はパス！

と黙っていたら、この愛嬢に営業電話攻勢に出られてしまいます。

キャバ嬢のお部屋訪問！ 本当かな？

高級キャバクラに行った次の日、お約束通り愛嬢から電話がかかってきました。昨日のお礼と、「また来てね」の電話でした。ある意味、ありきたりの営業電話でした。

また、次の日も電話がありました。なかなか営業熱心な子です。しかし、私にはあのプロっぽい接客がどうも気になって、ウキウキと足が向く気にはなれませんでした。

しかし、この営業電話が驚いた展開になりました。

日曜日。

彼女の休日です。

多くのキャバ嬢は、休日は行方不明になります。電話をしても出ないし、メールをしても返事も来ません。

次に会った時に、いろんな言い訳をします。休日は電源を切っているとか、ウチは電波が入らないとか、

「えっ？ 電話くれたの？ 鳴らなかったよ」

「としゃあしゃあと言うキャバ嬢。」

だって、休日に電話に出ようものなら、

「何やってるの？」

「会おうよ！」

ということになります。

ところが、日曜日に愛嬢から電話が来て、「何やってるの？ 会わない？」という電話でした。いきなり休日デートのお誘いか？

しかし、不幸なことに(ひよっとしたら幸いなことも)、その日は、用事があ

って彼女には会えませんでした。用事があると告げ、せつかくのお誘いに申し訳なかつたので、月曜日に同伴することにしました。

用事をすっぽかしてでも彼女に会うべきだったのか。心の葛藤がありました。

そうして、月曜日の待ち合わせの時間に彼女がやって来ました。お店で見るキャバ嬢と外で会うキャバ嬢は、雰囲気が違うものです。外で会う彼女は、お店で見る彼女よりもかわいく、足がすっごく綺麗でした。

しかも・・・巨乳。

もう、この時ひと目惚れしてしまいました。(遅い！)

食事をしながらの話は、お店でのプロっぽい話とは違い、結構盛り上がりました。そして、更に驚くことに、今度の日曜日に部屋に遊びに来ないかとお誘いをいただきました。

彼女は、料理が得意で、スパゲッティを作ってくれるとのこと。もう、天にものぼるような嬉しさです。

でも、これが彼女の営業方法なのか。少し疑いの気持ちもありますが、やはり彼女を信じることに。

お店でも、「スパゲッティ、楽しみだね」なんて言つと、彼女はちよつと怒つて、「大きな声で言わないで！」と。

これは本物だ！

キャバ嬢が銀座のクラブのホステスに

さて、今週末はキャバ嬢のお宅訪問です。ホントかな？ 営業かな？

半信半疑でありながら、とつても期待していました。「何時頃かな、待ち合わせはどこかな」

そうすると、愛嬢の方から電話がかかってきました。

「ゴメン、急な用事ができちゃったからその次の日曜でいい？」

出ました！ キャバ嬢お得意のドタキャン。

この頃は、そつかぁ、彼女にも用事があるんだろうし、仕方ないな、と思いましたが、時が経つにつれて、このドタキャンというのが、だんだんと当たり前になつてくるのです。

そうして、ドタキャンをされると、またかぁと思うようになります。今や、キャバ嬢と約束してもほとんど信用していません。たとえば、キャバ嬢と約束をして、本当に本人が来て、「あの約束は本当だったんだ」と思つてふつになりました。

ちなみに、同伴のドタキャンはあまりありません。

むしろ、お客側のドタキャンの方は多いかもしれません。

しかし、休日デートとなると、かなり高い確率でドタキャンがあります。

ということ、私は初めてのキャバクラ嬢のお宅訪問の夢は、ドタキャンによって、空しく散っていったのです。

まあ、次の日曜日があるわけですし、次回に期待です。それでも、気持ちは彼女と会う事でいっぱいだったので、また彼女と同伴することになりました。

ちなみに、この愛嬢は同伴の食事代は彼女が払いました。ランパブのありさ嬢もおごってくれるか、割り勘でした。ただし、その後同伴の食事代をおごってくれるキャバ嬢はひとりもいませんでしたが……

そうして、彼女とお店に行くのですが、お店の中では彼女は銀座嬢になります。

次の日曜日が近づき、段取りの話で電話をしました。

……不通。

電話にデンプ。

何回かけても留守電にしかありません。

そうこうしているうちに、また次の日曜日が通過してしまいました。

それから何度かけても彼女は出ません。しょうがないので、お店に直接行くことにしました。お店の入り口で、

「愛さん指名でお願いします」と言つと、ボーイさんは、
「彼女は辞めました」

なんだあ？

「じゃあ、彼女と仲の良かった子を席に着けてくれる？」

それから、愛嬢と仲のいいという子が席に着きました。

「愛ちゃんって、どうして辞めたの？」

「愛ちゃん？ 言っちゃっていいのかなあ……彼女ね、ここのお店のお客にスカウトされたらしくて、銀座のクラブで働くことにしたみたいだよ」

本当に銀座嬢になってしまった！

随分経つてから、彼女から電話が来て、銀座に移ったことを聞きました。そうして、「お店に来てね！」

そんなところ行けるかい！ そんな金は無い！

んなわけで、またありさ嬢のお店に戻ります……

ランパブがセクキャバになった！

摘発されたランパブも一ヶ月が過ぎ、店名とスタッフ総入れ替えで再開となりました。

店名とスタッフが変わったのなら、別な店になっただけのようですが、ただ新しい店は、全員トッププレスのお触りOKになったとのこと。ここで、トッププレスにならない六人組は辞めてしまいました。

ナンバーワンの優嬢は、これを機会に付き合っているホストと結婚。他の子たちもそれぞれ、長期休暇になったり、別のキャバクラに行ったりと、全員本当にバラバラになってしまいました。

「またお店が決まったら教えるね」とありさ嬢から連絡がありました。

しかし私の頭の中は、あの友里嬢はどうしたんだろうと。ありさ嬢はもう辞めてしまったんで、こっそりとセクキャバになったお店に潜入しました。

中は以前と何も変わっていません。入口には相変わらず写真が並んでいます。その写真を見ると、なーんといました、友里嬢が。さっそく彼女を指名。

そうして、彼女が席へ。

もう、めっちゃめっちゃめっちゃ、かわいかったああ。

彼女の下着姿だけでも、脳ミソがどこかに行ってしまうくらい興奮しているのに、トッププレス？ お触りOK？

もう信じられません。

風俗にも、びっくりするくらいかわいい子がいて、当然その子と、全裸で楽しめるのは普通の話ですが、こちらは、もともとトッププレスにならない子で、しかも私が彼女を見かけたのはキャバクラ。彼女は服を着ていたわけで、これら全ての要因が合算され、気分はもう最高潮です。

そしていよいよショータイム。

彼女の胸は、超がつくくらい形がいいのです。理想の胸の形は？ と聞かれたら、迷わずこの胸と言いたいほどのものでした。

それに触れてもいいなんて・・・

しかも、例によって私は悪ノリなので、パンツの中にも手を入れました。

彼女は下の毛はOKと言っていました。

そして、私の方から次回は同伴でお願いして、電話番号を交換しました。

しかし、こんな素敵な子と出会えたのに、彼女からも電話をもらったのに、もうこのお店に行くことはありませんでした。

今思えば、何で行かなかったのか、不思議でたまりません。かわいかったけど、何かフイリングが合わなかったのか？ タイムマシーンに乗って、当時の自分に質問してみたい気分です。

後で聞いた話ですが、彼女はこの店のマネージャーと結婚したという話です。

でも、自分の彼女が目の前で、他の男性に胸を揉まれても気にならないのかなあ？

そうして、またまたキャバ王と新規開拓が始まりました。

ブスっ子倶楽部

ランパブや高級キャバクラを後にして、キャバ王と私は新規開拓へと、駅の反対側の、少々寂れたキャバクラ街へと向かいました。

こちらにも、キャバクラはたくさんありますが、何か活気が無いような感じがします。

そこに、捨て看板に書かれた

『二千円ポツキリ』

の字を見かけました。

ちよつと辺りを見渡すと、そこにその二千円ポツキリのお店がありました。入り口にはボーイさんが立っていて、ポツタクリじゃないのかと怪しみながら潜入しました。

中に入ると、非常にすいていました。

なんか、ヤバい雰囲気です。

そこへ、我々二名に女の子が三人やって来ました。

この三人。見事なブス。

なんて表現したらいいんでしょう。

顔がひん曲がっているというか、ごっつい男というか。とにかく、三人とも誰に似てるといふより、違う生き物に見えるような感じです。

また、席に着いた子がすごい。

薬やつてるとか、客を取られて女の子をボコボコにしたとか。我々二人は、彼女たちの武勇伝(?)を、延々と聞かされるのであります。

あたりを見ると、やはり見事なくらいブス揃いです。どうやったらこんなにブスを集められるかというくらい。ブスにもいろんなタイプがいるんだなあ、と考えさせられました。ブスの博物館といったところでしょうか。

そこへ、ひとりだけ、たったひとりだけ、めっちゃ可愛い子がいました。ちよつと顔の感じは覚えていないのですが、ひとりだけ光り輝いていました。ひよつとしたら、普通の子だったのかもしれないけど、とにかくかわいく見えませんでした。

そうして、彼女がたまたま隣に座りました。(ラッキー！)

「損して得取れ」といったところでしょうか。

しかし、彼女はこう言いました。

「お願いだから、指名しないで」

彼女は、あのブス達の友達でこの店に入ったらしく、もし指名を取ろうものなら、あとでめっちゃめっちゃいじめられるとか。

他の店に行けば、そこそこ指名がとれるのに。非常にもつたいない子でした。

そして、チェックです。本当にひとり二千円で、ドリンク代もかかりませんでした。

しかし、はつきり言って、二千円でも高い！

こは、「ブスっ子倶楽部」という名前ではありません。私たちが勝手につけた名前です。もう二度と行くことはありませんが、ここに行く客ってやっぱり二千円にひかれて行くんでしょうね。それとも、ブスフェチっているんでしょうか。

我々は、自分達の気持ちの中で、今日はキャバクラに行かなかったことにして、気を取り直して、更なる旅に出かけました。

どっちがお客なんだ？

ブスっ子倶楽部で予定外(?)の時間を過ごした我々一行は、さらに奥へと進んで行きました。

そこで正面から歩いてくる一人の好青年が我々に声をかけて来ました。顔や服装を見ると、どう見てもホスト風です。

そして彼は一言、

「お久しぶりです！」

この彼は、私がデビューして、今は潰れてしまったキャバクラのボーイさんだった人です。彼は、キャバ王と顔見知りで、それで彼はキャバ王に声をかけたのでした。

しかし、二枚目なボーイさん。ジャーニーズ系です。名前は中村君と言います。

彼は、例の店が潰れてから、この近所の店で働いています。そして、自分の店に来ないかということです。

キャバ王は、知っているボーイさんということで、彼のお店に行くことにしました。

お店は比較的小さく、在籍は三十名ほどといったところでしょうか。

私は、トイレに行きたくなって、まずはトイレへ。そしてトイレから戻って来ると、キャバ王には既にスリムな美人が着いていました。

私のお相手は向こう側を向いています。顔は見えません。

しかし、後姿を見ると少々お肉が・・・デブじゃないけど、ポッチャ系。

そして顔を見ると、相武紗季に似ている感じでした。顔は、まあ、いいんじゃないでしょうか。相武紗季のポッチャ系です。

さて彼女はというと、最初からタメ口です。まあ、キャバ嬢には少々ありがちですね。そして会話は、自分の彼氏の愚痴ばかりです。しかも、感情込めて彼氏のことを熱弁します。しかも、私にはまったく興味がないような素振りです。本当にどっちが客だかわからない一時間でした。

すごい美人というわけではないし、会話は面白くないし、まあ、一時間を単に過ごしたという感じでした。

そこでチェックをしました。今日は二連敗でした。

キャバクラに通っていると、新規開拓ではこのようなことは珍しくないことです。しかし、帰り際に彼女が電話番号を聞いてきました。オイオイ、営業電話する気かよ。また、彼氏の話を知ってか？

一方スリムな美人が着いたキャバ王の方は？

彼女は昼間は小さな会社の社長で、キャバクラには、外車でご出勤とか。

「何でキャバ嬢やってるんだ？」という感じですよ。とにかく会話のレベルが高すぎて、何言ってるのかさっぱりわからなかったということです。

キャバクラ嬢って、我々を楽しませてくれるホステスさんのはずですが、いろんなタイプがいるんだなと思わせた一日でした。それでも、そんな彼女たちには指名してくれるお客がいるわけで、人にもいろんな好みがあるんですね。

キャバ王は、まだ二、三人、気になる子がいるとのこと、次もまた、このお店に行ってみることにするとのことです。

キャバ嬢からデートのお誘い

新規開拓をしたキャバクラの紗季嬢から電話がありました。
「今何してるの？」

という、ごく普通の営業電話です。「店に来い」とは言いませんでしたが、彼氏の愚痴をたっぷりと聞かされた私は、特に彼女に会いたいとも思いませんでした。

しかし、バレンタインの日に、電話がありました。

「ハンさんのためにチョコレート買ったんだけど、店に来てくれる？」

実は、今までキャバ嬢からバレンタインのチョコをもらったことがなく、会社でも義理チョコくらいしかなかったため、正直言って嬉しかったのです。

自分のためにチョコを買ってくれるなんて・・・この時点では、何の免疫もありません)

そして、バレンタインのチョコをもらいに店に行ってしまうました。キャバクラにひとりで行って、彼女から手渡されたチョコは、コンビニとかで売っているような、非常に安物くさいチョコでした。ひょっとしたら店が用意したチョコかもしれない。

そして、またまた彼氏の愚痴話を聞くことになりました・・・
彼女にはそれしか話題がないんでしょうね。それに、人の話を聞く子じゃないので、私はずっと聞き役です。またまた無駄な時間を過ごしてしまいました。

それからまた、何日か経ってから彼女から電話がかかってきました。

「今から会えない？」

出ました、またまた営業電話。

キャバ嬢たちは、

「お店に来て」とは言わず、「会いたい」と言います。

本当に会いたかったら、店の無い日に「会いたい」って電話すれば？と思うのですが、そう言い返すこともなく行ってしまふのは悲しい男のサガですね。

彼女の電話も「店に来い」という電話かと思ったら、

「今日はお店を休むから、これから遊びに行かない？」

なんとお誘いの電話でした。

どこかで飲もうかと思っただけですが、

「できればうちまで車で迎えに来て欲しいんだけど」

「どこに住んでいるの？」

場所を聞いたらすごく遠いのです。車で、道が混んでなくて一時間くらいのことです。それでも、一度家に帰って、車を取りに行行って彼女を迎えに行きました。

彼氏と喧嘩したみたいで、今日はお店に行く気分にはなれないとのこと。ちなみに、当日になって仕事を休むことをお店に伝えるのは「当欠」と言って、罰金が取られます。それを承知で彼女はお店を休みました。

私は彼女の家の近所まで迎えに行きました。車を止めて彼女に電話をすると、

彼女は車のところへやって来ました。

「車だと飲みに行けないし、どこへ行くのか？」

「どこでもいいよ。どこかへ連れて行って！」

私は、適当に車を走らせました。いわゆる、ドライブってやつですね。それから、ファミレスに行つて、彼女の愚痴を聞いていました。

彼女が私を誘った理由は、バレンタインの時に来てくれたし、すごく話をしやすいからだとか。実は、バレンタインには電話をかけたかったらしいのですが、私しか来なかつたみたいです。

そりゃあ、ちよつとポツチャ系だし、話はずまらないし、普通は指名はしないでしょう。

そうしてまたドライブへ。

しかし、密室で二人きり。彼女はポツチャ系ということは、胸がなかなか大きくて、目がいつてしょうがありません。そうして、ムラムラしてしまう私でした。

触りたい……。

キャバ嬢にワイセツ行為

キャバクラの紗季嬢に誘われ、ドライブをすることになった私は、彼女に対するムラムラする気持ちを抑えつつ、車を走らせていました。

ちなみに、私の車は父親のカローラです。

よくキャバクラ嬢に、

「車持ってます？」と聞かれ、父親と兼用（ほとんど私のもの）ですが、

「持つてるよ」と答えると、必ず次の質問は、

「何乗ってるの？」です。

私の答えは

「カローラ」

ここで、会話は終了します。

「お金を貯めて、外車でも買いたい」

今まで、そんなこと考えたこともなかったのですが、キャバクラに行くようになって、考えがいろいろと変わって来ました。服装だとか、髪型だとか、ダサイはダサイままなんです、自分なりにカッコつけてるつもりです。

女性の存在って、男を変えますよね。

でも、キャバクラ通いをしていたんじゃ、車は永遠に買えないでしょうね。もしローンで買ったなら、ローンとキャバクラで二重の出費地獄です。

さて、いつものように話が大幅にそれてしまいましたが、我々はカラオケに行くことにしました。実は私は、カラオケは大の苦手です。正直言って、曲が全然わかりません。だから、大抵は一緒に行った人にずっと歌ってもらいます。

彼女のカラオケの実力は、私の今まで知っている人の中でも三本の指に入るくらい歌がヘタ。

しかしながら、私は

「歌いなれてるね」とか

「感情がこもってるね」とか

「この歌好きなんだあ」とか

歌唱力に触れることなく、彼女を持ち上げました。本人は、すごく気分よく歌っていて、自分がヘタだという自覚がないみたいです。

何曲か歌って、ちよつとインターバルがあった時、私は彼女にちよつと無理やりキスをしました。(自然にという意味ではないということです)

彼女は無抵抗でした。

ついでに、胸にも触れましたがこれもOKでした。ますますムラムラしてきたのですが、ここはカラオケ。

これ以上のことはちよつと・・・

続きは彼女の家か・・・

そうして、彼女を家まで送り届けました。

「部屋に上がってもいい?」

「え、だめだよ」

と、彼女に拒否されました。

しかし、私は理性が抑えきれずに、また彼女にキスをして、胸に触れ、ブラをはずし、上半身を脱がし始めました。

「ちよ、ちよつと待って。今日は彼氏が家に来るかもしれないから駄目だけど、だから、今度彼が来ない時に部屋に入ってもいいから。ね!」

そして彼女は、

「部屋に入ってもいいけど・・・」

私の部屋に入ったら、思いっきり引いちゃうと思うよ」

引いちゃうって?

死ぬほど部屋が汚いとか、変な宗教をやっている、大きな仏像みたいなものがあるとか。いろいろ詮索してみました。

そうして、部屋に入って目にしたものは・・・

ここから先は、製品版の「キャバクラ失敗体験談」でお楽しみください。

購入方法は、ブログ「続・キャバクラ失敗体験談」に掲載されています。

【キャバクラ大学】の特典付きです。

どうぞよろしく願います。